臨床報告

舌下面に発生した粘表皮癌の1例

宇田川 源*** 西 原 昇**
赤 城 裕 一*** 安 藤 智 博*

A Case of Mucoepidermoid Carcinoma on the Undersurface of the Tongue

GEN UDAGAWA***, NOBORU NISHIHARA**,
YUICHI AKAGI*** AND TOMOHIRO ANDO*

Abstract : We report a case of a sublingual mucoepidermoid carcinoma. The most frequent site of mucoepidermoid carcinoma is the major salivary glands and in some cases it also develops in the minor salivary glands. However, a case of mucoepidermoid carcinoma on the tongue is quite unusual. The patient was a 60-year-old woman who presented to our department with a chief complaint of feeling sublingual discomfort. The patient's past history included hypertension and hyperlipidemia. An exophytic mass measuring 5×5mm was found on the undersurface of the tongue. At the first medical examination, a clinical diagnosis of tongue neoplasm or mucocele was made. Excisional biopsy under local anesthesia was performed. A pathological diagnosis of mucoepidermoid carcinoma was made. At the time of this report, ten months after the surgery, no recurrence has been observed.

Key words : mucoepidermoid carcinoma (粘表皮癌), tongue (舌), minor salivary gland (小唾液腺)
[Received Nob. 13, 2015]

緒 言

粘表皮癌 (mucoepidermoid carcinoma) は1945年にStewartにより粘表皮腫として報告された。当初、本腫瘍は基本的に良性腫瘍とされたが、その後、転移する症例が報告され1991年WHO分類では癌分類に含まれ、粘表皮癌の名称となった。組織学的に粘表皮癌は粘液産生細胞、類表皮細胞 (扁平上皮細胞)、未分化な小型の中間細胞の3種類により構成されている。好発年齢は30~50歳であるが、10歳以下の小児や思春期にも発生する腫瘍である。一般的に性差はないが、やや女性に多く発生している。全唾液腺腫瘍でも原発性癌腫としては最も多く認められる。好発部位は耳下腺であり、小唾液腺では口蓋腺に好発するが、舌に発生するものは極めてまれであり、他疾患との鑑別が困難となる。今回われわれは舌下面に外向性の腫瘍を形成し、診断に苦慮した粘表皮癌を経験したので、その概

要を報告する。

症 例

患者: 60歳代女性。
初診: 2014年6月。
主訴: 舌下部腫瘍の違和感。
既往歴: 高血圧症, 高脂血症。
常用薬: アムロジピン, アトルバスタチン。
現病歴: 2014年6月舌下部の腫瘍を自覚し近歯科医院を受診し、精査および加療を目的に当科紹介となった。
現症:
全身所見: 体格中等度, 栄養状態良好であった。
口腔外所見: 顔貌左右対称で所属リンパ節の腫脹, 圧痛は認められなかった。
口腔内所見: 舌下部右側に5×5mm大の弾性硬で境界明瞭な腫瘍を認め、非可動性であった。被覆粘膜の表面は

* 東京女子医科大学医学部歯科口腔外科学教室 (主任: 安藤智博教授)

** 医療法人社団成和会西新井病院口腔外科 (主任: 西原 昇部長)

* Department of Oral and Maxillofacial Surgery, Tokyo Women's Medical University, School of Medicine (Chief: Prof. TOMOHIRO ANDO)
8-1 Kawadacho, Shinjuku 162-8666, Japan.

** Department of Oral Maxillofacial Surgery, Nishiarai Hospital (Chief: Dr. NOBORU NISHIHARA)

写真 1 初診時口腔内所見（舌下面）
直径5mmの境界明瞭な腫瘤を認めた。

写真 2 腫瘍切除後10か月経過した口腔内所見

滑沢で正常粘膜色を呈していた（写真1）。

臨床診断：舌腫瘍もしくは粘液嚢胞。

処置および経過

2014年7月に局所麻酔下に切除生検を施行した。CO₂レーザーを用いて腫瘤を粘膜とともに紡錘形に切除した。腫瘤の直下に小唾液腺と思われる組織を認めたため一部切除した。病理組織所見では切除断端付近に腫瘍組織を認め、全摘出されていない可能性を考慮し、追加切除を行い追加切除検体が正常組織であることを確認した。術後、舌尖部に知覚鈍麻を認めているが10か月経過した現在まで再発などの異常所見は認めていない（写真2）。

摘出物所見：大きさ5×5mm大、淡白色、球形の腫瘍であった。

病理組織所見：錯角化重層扁平上皮に被覆された線維性結合組織内を腫瘍組織が胞巣を形成しながら充実に増殖しており、明らかな被膜は認められなかった。腫瘍胞巣は一部で腺腔や嚢胞腔を伴う像が観察された（写真3A）。腫瘍胞巣は、多数の粘液産生細胞と扁平上皮、中間細胞から構成されていた（写真3B）。切除断端部の拡大像では断端部に近接して胞巣状の腫瘍組織が認められ、追加切除を検討する必要がある（写真3C）。Goode分類による病理組織学的悪性度では、嚢胞成分の割合が20%未満（－）、神経浸潤の存在（－）、腫瘍壊死の存在（－）、強拡大10視野あたり4個以上の分裂像（－）、退形成の存在（－）であり、低悪性度粘表皮癌と診断した。

病理組織診断：粘表皮癌（低悪性度）。なお、追加切除した組織は正常唾液腺組織であった。

考 察

粘表皮癌は全唾液腺腫瘍の3～15%を占めている。特に本腫瘍は小唾液腺腫瘍の15～20%を占め、小唾液腺に

発生率が高いことが特徴の一つである¹⁾。小唾液腺では口蓋に多く発生し、舌に発生するものは極めてまれである²⁻⁶⁾。

舌には3群の小唾液腺が知られている。舌尖の下部に存在し舌小帯の両側に開口している前舌腺（Blandin-Nuhn腺）、舌根部と舌縁後部に存在する後舌腺、有郭乳頭や葉状乳頭の周囲に存在するEbner腺の3群である。前舌腺は舌尖部の舌下面付近、舌中隔を中心にして、左右対称的に1対存在しており、長径13mm、幅径5mm、厚径5mmの楕円形の腺体をしている⁷⁾。本症例は発生部位から前舌腺に由来するものである可能性が高いと思われる。

粘表皮癌は病理組織学的悪性度により予後が著しく異なる。2005年のWHO分類では、1998年にGoodeら⁸⁾により報告された分類法が採用され、嚢胞成分の割合が20%未満、神経浸潤、腫瘍壊死、核分裂像、退形成の5項目を点数化して低悪性度、中悪性度、高悪性度の3型で評価している。自験例は病理組織診断から低悪性度であった。

治療法に関しては、粘表皮癌は放射線療法や化学療法に対する感受性が低いため、外科療法が第一選択とされている。陶山ら⁹⁾の報告によれば、小唾液腺原発粘表皮癌5例に対して外科療法のみを施行し1例に対して外科療法、化学・放射線療法を施行しているがいずれの症例でも再発は認めていない。また、田中ら¹⁰⁾は小唾液腺原発高悪性度粘表皮癌に対する術前化学療法や放射線療法の効果は乏しかったと報告している。自験例は外向性に腫瘤を形成したため、舌腫瘍（良性）や粘液嚢胞を疑い、CO₂レーザーを用いて切除した。また、唾液腺腫瘍を想定とした拡大切除は行わなかった。摘出物の全体像（写真3A）では、切除面付近に腫瘍組織を認めたため追加切除を行い、追加切除検体が正常組織であることを確認した。腫瘍の全身的検索や切除後の放射線治療、化学療法については、病変が小さく患者も希望されなかったため、追加切除後の経過観察の

写真 3 病理組織所見

- A: 全体像 (HE 染色) 錯角化重層扁平上皮に被覆された繊維性結合組織内に腫瘍組織が胞巣を形成しながら充実性に増殖している。
 B: 強拡大 (HE 染色) 腫瘍胞巣は、多数の粘液産生細胞と扁平上皮、中間細胞 (矢印) から構成されている。
 C: 中拡大 (HE 染色) 切除断端に近接して胞巣状の腫瘍組織が認められる (矢印)。

み行っている。

舌下面に発する粘表皮癌は臨床所見として粘液嚢胞と診断されることがある。鈴木ら³⁾の報告は自験例と同様に、舌下面に粘表皮癌が発生したものであり初診時に粘液嚢胞と診断した。腫瘍を形成した機序については、腫瘍による導管の閉塞と腫瘍細胞からの粘液の分泌によって粘液が貯留し腫瘍を形成すると推測している。宮本ら²⁾は同様に舌下面に発生した粘表皮癌を報告しているが、34×24mmと本症例や鈴木ら³⁾の症例と比較して大きなものであり、初回手術より5年経過後に頸部リンパ節転移を認めている。舌下面にはBlandin-Nuhn嚢胞が発生するが、臨床所見でBlandin-Nuhn嚢胞が疑われる場合にも初期の粘表皮癌である可能性があり、増大したものではリンパ節転移が起こりうるため、早期切除と病理診断を行うことが重要であると思われる。本症例に関しても、今後とも注意深く経過観察を行っていく。

結 語

今回われわれは舌下面に発生した粘表皮癌の1例を経験したので文献的考察を加えその概要を報告した。

謝辞ならびに利益相反 稿を終えるにあたり、本症例の診断について御教示頂きました東京女子医科大学病院病理診断科、長嶋洋治教授に深謝致します。

本論文について利益相反はありません。

引用文献

- 1) 日本唾液腺学会：唾液腺腫瘍アトラス（日本唾液腺学会編）。第1版，金原出版株式会社，東京，pp. 89-95，2005。
- 2) 宮本亮三，北原辰哉，須田 聡，他：前舌腺に生じた粘表皮癌の1例。口科誌，54：34-38，2005。
- 3) 鈴木将之，木下靖朗，矢島哲弥：前舌腺に発生した粘表皮癌の1例。日口外誌，48：534-536，2002。
- 4) 中野 宏，柴田敏章，中井 茂，他：舌に発生した小唾液腺由来の粘表皮癌例。耳鼻臨床，92：375-379，1999。
- 5) 高橋英俊，金子忠良，松田憲一，他：高齢者の舌小唾液腺に生じた粘表皮癌の1例。東医大誌，63：62-66，2005。
- 6) Martelluci, S., Pagliuca, G., Vincentiis, M.V., et al.: Mucoepidermoid Carcinoma of the Tongue Base Mimicking an Ectopic Thyroid. Case Reports in Otolaryngology, 2013：1-3, 2013。
- 7) 上條雍彦：口腔解剖学 第5巻 内臓学。第1版，アナトーム社，東京，pp. 1452-1455，1968。
- 8) Goode, R.K., Auclair, P.L. and Ellis, G.L.: Mucoepidermoid carcinoma of intraoral salivary glands: clinical and histopathologic analysis of 234 cases with evaluation of grading criteria. Cancer, 82：1217-1224, 1998。
- 9) 陶山一隆，川崎五郎，徳久道生，他：小唾液腺に発生した粘表皮癌症例の臨床病理学的検討。口腔腫瘍，8：282-286，1996。
- 10) 田中香衣，小村 健，原田浩之，他：口腔内小唾液腺癌45例の臨床的検討。口腔腫瘍，24：21-27，2012。